

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	澤村 雅史
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 福音書記者マタイの執筆動機およびその自己理解について			
論文審査担当者			
主 査	教 授	辻 学	
審査委員	教 授	市川 浩	
審査委員	教 授	吉村慎太郎	
審査委員	教 授	長田 浩彰	
審査委員	教 授	須藤伊知郎（西南学院大学神学部）	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、新約聖書の中でもユダヤ教的色彩が非常に濃いマタイ福音書を取り上げ、福音書記者マタイが自らを未だユダヤ教の内部に位置づけているのか、それともキリスト教という新しい宗教運動として理解しているのかという、近年大きな議論となっている問題について新しい知見を提供している。マタイの自己理解は、紀元1世紀後半以降に生じた、ユダヤ教内諸集団によるユダヤ教アイデンティティを再構築する過程の中に位置づけることができるというのが本論文の結論であるが、この結論は、「キリスト教正典」である新約聖書の冒頭に位置し、イエスの言行を描き出す文書が、自らをユダヤ教の枠内で理解しているという、極めて刺激的な内容であって、学説史への大きな貢献であると共に、さらにキリスト教研究全体の中で、「キリスト教とは何か」という問題をめぐって今後広く議論を巻き起こすことも予想される。</p> <p>マタイ福音書の執筆動機は、ユダヤ人に対する宣教から異邦人宣教への転換という図式で理解するのが従来の定説であったが、本論文はその点を批判的に検証し、むしろそのような図式で自己を理解しようとする他の「キリスト教」集団に対する批判として、完全なる福音書を執筆し、律法遵守を重んじる宣教へと方向修正することこそが福音書記者マタイの意図であるとしており、この点もまた研究史上の重要な知見として高く評価できる。論文の概要は以下の通りである。</p> <p>第1章では、マタイ福音書がキリスト教文書であるという前提が問い直されるようになった経緯を概観すると共に、福音書は福音書記者の属する共同体を超えて、より広範な読者を前提としていると主張する。</p> <p>第2章では、マタイが資料として用いたマルコ福音書との比較を通して、マタイ福音書では律法遵守がより強調されると共に、同じく律法遵守を主張していたファリサイ派への批判が先鋭化されていること、そして両者の対立軸になっているのは、律法解釈におけるイエス・キリストの権威という点にあることを示している。</p> <p>第3章では、マタイ福音書内の「全て」(πᾶς) という語の用例分析によって、福音書記者は律法「全て」の遵守を要求していると共に、それはイエスの解釈に基づいた律法実践でなければならないと考えていることを明らかにしている。</p>			

第4章および第5章では、マタイにとって、律法遵守を基準とした神の民イスラエルの再編が、宣教における喫緊の課題であることを明らかにすると共に、その課題の中に、非ユダヤ人（＝異邦人）への宣教も当初からの基本構想の一つとして位置づけられていることを論証している。そして、マタイにとってこの異邦人宣教は、異邦人が律法遵守によってイスラエルの中に加わることであるから、厳密にはユダヤ教への改宗運動と理解できるという。

第6章および第7章では、マタイがどのような状況で、律法重視の諸民族宣教を推し進めようとしているのかを明らかにしている。マタイの批判は一方では、ファリサイ派・律法学者に象徴されるラビ的ユダヤ教、もう一方では、律法遵守を求めない諸民族宣教の展開、すなわちパウロの宣教理解に向けられている。このパウロ的傾向を反映したマルコ福音書が描くイエス像の流布を防ぐためマタイは、マルコ福音書を徹底的に換骨奪胎し、駆逐することが必要だと考えた。これが、マタイ福音書が執筆された動機であるという。この結論は、マルコ福音書を基にしてマタイ福音書が新たに記された理由として納得のいくものであり、マタイ福音書研究全体への大きな貢献となっている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。